様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８０４３８

研究課題名（和文）近現代における世界経済の形成と熱帯地域－飢饉、疫病、そして「南北格差」

研究課題名（英文）Tropics and the Emergence of Modern World Economy: Famines, Epidemics and 'North-South Divide'

研究代表者
脇村　孝平（WAKIMURA, KOHEI）

大阪市立大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：３０２３０９３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の研究成果のうち、特に「南北格差」の歴史的起源、すなわち温帯地域と熱帯地域の経済格差の歴史的起源を探る作業において特筆すべき成果があった。具体的には、参照枠としたW・A・ルイスの「熱帯発展」論の欠落部分を埋めたことである。第一は、熱帯アジアにおける無制限労働の供給源であったインドにおける過剰人口の問題を環境史的文脈のなかで明らかにしたこと。第二は、ルイスが明示的に論じていない熱帯地域における農業発展の自然環境的諸条件を明らかにしたこと。第三は、ルイスの視野の外にあった、19世紀前半の熱帯地域（東南アジア）における労働供給の問題（急激な人口増加の問題）を明らかにしたこと。

研究成果の概要（英文）：We examined the argument, ‘ tropical development ’ posed by W.A. Lewis. Then we pointed out three issues which were neglected in his argument. Firstly, we clarified its ecological context of the regions where the population density was so high in India during the 19th century. These regions became the source of unlimited supply of labour in tropical Asia. Secondly, we discussed the ecological conditions of tropics in general in terms of agricultural development. Thirdly, we also clarified the fact that there occurred a very high rate of population growth during the first half of 19th century in some regions of Southeast Asia. These phenomena clearly show that this high speed of population growth was the backdrop of the labour supplies to the primary goods sectors.

研究分野：社会科学

キーワード：世界経済　熱帯　飢饉　疫病　南北格差

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、かつて、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての時期に英領インドで頻発した飢饉や疫病の研究を行った。その後、19 世紀のインドおけるコレラ流行に関して、グローバルな連関を考慮しつつ研究を行った。こうした前提を踏まえて、本研究では、19 世紀のアジアを中心としつつ、このような飢饉や疫病の発現に関して、より広い熱帯地域という文脈のなかで、主に自然環境的な諸条件に留意しつつ、その原因を究明することを目指した。加えて、いわゆる「南北格差」（ここでは、温帯地域と熱帯地域の経済格差と読み替える）の起源を、自然環境的な諸条件に注目しつつ、この時期の熱帯地域の経済史的な過程の中に求めることを目指した。

２．研究の目的

本研究は、近現代（19 世紀後半と 20 世紀前半）における世界経済の形成過程で、熱帯地域が如何に編入され、如何なる影響を受けたのか、そして「南北格差」（温帯地域と熱帯地域の経済格差） が如何に形成されたのかを、社会経済史的および環境史的な視角の両面から解明することを目的とした。大きく二つに研究課題は分かれる。第一の研究課題は、主に熱帯の半乾燥地域が問題となるが、19 世紀後半の世界経済への編入過程において、熱帯・半乾燥地域の自然環境的な諸条件が、飢饉や疫病などの災害の多発となって現象化した経緯を明らかにすることである。

第二の研究課題は、「南北格差」、すなわち温帯地域と熱帯地域の経済格差の起源を、主に 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての熱帯地域の経済史的過程の中に明らかにすることであったが、自然環境的な制約要因の解明に留意することを目指した。

３．研究の方法

上記の研究目的のうち、第一の研究課題のうち、飢饉に関しては、19 世紀後半のインドの諸飢饉の事例を、19 世紀前半のアイルランド大飢饉との比較の視野のなかで分析した。要するに、温帯で起きた飢饉との比較によって、その特徴を明らかにしようと試みた。疫病に関しては、主に、19 世紀の後半にインドのベンガルで起きた疫病マラリアの事例を分析した。この疫病マラリアの分析には、地理情報システム（GIS）の手法を取り入れて、原因の解明に役立たせようとした。

第二の研究課題に関しては、W・A・ルイスの「要素交易条件（factoral terms of trade）」論を基軸とした「熱帯発展」論を参照枠とした。ルイスは、熱帯地域と温帯地域との間の経済格差が、それぞれの地域の一次産品生産部門の所得格差（実質賃金の格差）、さらにより根底的には自給的食糧生産部門の食糧生産性の格差に起因すると指摘した。要するに、熱帯地域の一次産品生産部門における低賃金が、温帯地域に比べた時の、この地域の経済発展の相対的な低さを規定しているという説明になる。この議論の前提として、自給的食糧生産部門から一次産品生産部門への無制限労働供給という事態が想定されていた（要するに、彼の有名な「労働の無制限供給の理論」の世界経済版である）。この問題は、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての東南アジアの場合、外部に位置するインド（あるいは中国）からの大量の低賃金労働の移動によって解決された。そして、インドの農村における自給的食糧生産部門の極めて低い食糧生産性が、人口稀少なはずの熱帯地域における低賃金労働を決定していたということになる。ルイスは、このような史実を的確に捉えていた。本研究では、第二の研究課題に関して、このようなルイスの仮説を様々な角度から検討した。

４．研究成果

第一の研究課題のうち飢饉に関しては、後述の「主な発表論文等」の部分にある「イン

ド 19 世紀後半の飢饉の歴史像－アイルランド大飢饉との関連で」という論稿を執筆した。この中で、インドの 19 世紀後半の諸飢饉の被害規模が大きくなった理由として、「熱帯性」の問題を指摘した。以下の通りである。すなわち、インド亜大陸が熱帯もしくは亜熱帯に位置していていたことが、これらの諸飢饉の被害に重大な影響を与えたという点。この時期のインドにおける「土地の稀少化」の問題、そして「疾病環境の悪化」という問題については、研究代表者はこれまでの研究成果のなかで明らかにしてきた。しかしながら、この論稿では、これらの問題が熱帯的な自然環境によってより激しく現れていることを強調した。この時期のインドに起こった飢饉の多くは、インド亜大陸の西半分に分布している半乾燥熱帯地域で起こっている。南西モンスーン（６月から９月にかけて雨をもたらしてくれる）は、この半乾燥熱帯地域のカリフ季の農業を可能にしてくれるが、このモンスーンは気まぐれであり、「土地の稀少化」によって劣等地が農地として利用されるようになったため、モンスーンの不調による降水量不足の影響はより厳しくなったであろうと指摘した。それに加えて、マラリアやコレラなどの熱帯病の疫病化がこの半乾燥地域で激しくなったことも指摘した。これらの点は、温帯にあるアイルランドの飢饉では見られなかった状況である。

第一の研究課題のうち疫病に関しては、19 世紀後半のインド・ベンガルにおける疫病マラリアの研究のなかで究明した。この研究に関しては、2015 年 12 月から 2016 年３月までの期間に各所の国際会議で行った研究報告のなかで発表した。この研究では、インド・ベンガルに関して、人口動態統計によって死亡原因別の死亡率が入手できる 1870 年代から 1910 年代までの期間、県別のマラリア死亡率の推移を GIS の手法を使って空間的に明らかにした。そのなかで特筆すべきことは、以下の点である。これまで半ば通説的に主張されてきた、ベンガル・デルタ地域における「環境の変化」説、すなわち溢流灌漑の阻害が疫病マラリアの蔓延を導いたとする説は、上記の地理的分析では必ずしも支持されないことを明らかにした。実際、私たち（谷口謙次氏の助力によって、GIS の分析が可能となった）の明示したのは、マラリア死亡率が継続的に高かったのは、「環境の変化」原因説が当てはまる西ベンガルや中央ベンガルではなく、その仮説が必ずしも当てはまらない北ベンガル地域であったという事実であった。北ベンガルの場合、「労働移動」原因説がより当てはまる。この点は今後一層の検討が必要になるが、本研究で明らかにした新事実と言えよう。

第二の研究課題に関しては、以下の諸点を明らかにした。ルイス仮説で問われていない諸問題を明らかにするという形で研究を進めた。第一の問題は、そもそもルイスの議論には、熱帯アジアにおいて無制限労働供給の源泉となったインドや中国に関する詳しい説明がない点である。一般的に言えば、熱帯地域はそもそも人口密度の極めて低い世界である。ほぼ熱帯に位置するインドが、如何なる理由で労働の無制限供給の源泉となりうるような人口過剰地域となったのかの説明がないのである。「主な発表論文等」にある「人口と長期的発展径路－自然環境と『開墾・定住』過程」という論稿のなかでその問題を検討した。熱帯地域の通例に反して、インドの一部の地域（例えば、大河川の中流域）では、古代以来、人口稠密な世界を形成してきたという歴史があるが、この歴史過程を究明した。ただし、この地域の人口と土地利用の関係の歴史に関して、より立ち入った検討が必要であろう。

第二の問題は、ルイスの「熱帯発展」論には、熱帯の自然環境的諸条件に関するまとまった議論が存在しない点である。「主な発表

論文等」にある「熱帯と世界経済、1880～1913年－W・A・ルイス『熱帯の発展』論ノート」と題する論稿でその問題を検討した。具体的には、半乾燥熱帯（サバンナ）および湿潤熱帯（熱帯雨林）における農業発展に関して、ルイスが諸著作のなかで示している認識を例示しつつ、全体として言うならば、必ずしも体系的な議論が存在しない点を明らかにした。

第三に、熱帯地域で早くも 19 世紀前半から一次産品輸出に特化しつつあった東南アジアの島嶼部（フィリピン、ジャワ）において、労働の無制限供給の状況が如何なる形で行われていたかを問うた。これもまた、ルイスの視野の外にあった問題である。2015 年の世界経済史会議の‘Deflation, Money and Commodities: Maritime Asia and its Linkages to the Americas in the First Half of the 19th Century’と題するセッションで、‘Export Trade, Deflation and Population Growth in Maritime Asia during the First Half of the 19th Century: Focusing on India’という報告を行ったが、そこで、東南アジアの島嶼部の一部では、19 世紀初頭以降、人口増加率が著しく高まった事実を指摘した。例えば、フィリピンでは 1800 年から 1876 年までの人口増加率は 1.65%、ジャワでは 1815 年から 1850 年までで 1.65%と、驚異的な高さとなっている。この時期、フィリピンでは砂糖・タバコ・マニラ麻、ジャワでは砂糖・コーヒーといった一次産品の生産・輸出が著しかったが、低賃金労働供給はこのような急激な人口増加を背景として可能になったと考えられる。

以上が、主なる研究成果である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 脇村孝平、近現代東アジアにおける海港検疫とグローバルな文脈－「三重基準」をめぐって、歴史の理論と教育、査読無、第 145 号、2016 年、3-17 頁

② 脇村孝平、インド 19 世紀後半の飢饉の歴史像－アイルランド大飢饉との関連で、勝田俊輔編『アイルランド大飢饉－歴史と記憶』刀水書房、査読無、巻－、2016 年、185-210 頁

③ 脇村孝平、人口と長期的発展径路－自然環境と『開墾・定住』過程、田辺明生・杉原薫・脇村孝平編『多様性社会の挑戦』（現代インド第１巻）東京大学出版会、査読無、巻－、2015 年、392 頁

④ 脇村孝平、熱帯と世界経済，1880～1913 年－W・A・ルイス『熱帯の発展』論ノート、経済学雑誌、査読無、第 115 巻 第２号、2014 年、157-174 頁

〔学会発表〕（計 11 件）

① WAKIMURA Kohei 、Epidemic Malaria, Semi-Arid Tropics and ‘Colonial Development’: The Cases of North and East India, 1871-1920、TNAU-INDAS International Conference, 'Toward Sustainable Development of India and South Asia: Population, Resources, and Environment'、2016 年 3 月 2 日、Tamil Nadu Agricultural University, Coimbatore, Tamil Nadu, India

② WAKIMURA Kohei、Epidemic Malaria and ‘Colonial Development’: The Cases of North and East India, 1871-1920、Symposium to Inaugurate the Indio-Japan Collaborative Program for Historical Studies、2016 年 1 月 5 日、India International Center, New Delhi, India

③ WAKIMURA Kohei、Malaria and Population Changes in Bengal, 1872-1931 : Toward a Spatial Analysis 、The 4th International Congress of Bengal Studies、2015 年 12 月 13 日、東京外国語大学（東京都 府中市）

④ WAKIMURA Kohei、'Situating the East Asian Quarantine Politics in the International Context: The Late 19th Century and the Interwar Period、The Session 'The Globalization of Medicine and Public Health: Economic and Social Perspectives (1850-2000)', The XVIIth

World Economic History Congress、2015年8月6日、国立京都国際会館(京都府 京都市)

⑤ WAKIMURA Kohei 、Export Trade, Deflation and Agrarian Economy in India during the First Half of the 19th Century、The Session 'Deflation, money and commodities: Maritime Asia and its linkages to the Americas in the first half of the 19th century', XVIIth World Economic History Congress、2015 年 8 月 4 日、国立京都国際会館 (京都府 京都市)

⑥ WAKIMURA Kohei、Malaria and Population Changes in Bengal, 1872-1931 : Toward a Spatial Analysis 、The Third Conference: GIS-based Global History from Asian Perspective、2015年6月7日、東京大学 本郷キャンパス(東京都 文京区)

⑦ 脇村孝平、グローバル・ヒストリーとインド－英領期を中心に、2014年度・現代インド・南アジアセミナー、2014年9月15 日、広島大学 東広島キャンパス(広島県 東広島市)

⑧ 脇村孝平、India's Export Trade during the First Half of the 19th Century: Growth, Structural Change and Fluctuations、国際ワークショップ「19世紀前半『世界不況』下の貿易・貨幣・農業：ユーラシア東南部における比較と関連」、2014年9月7日、愛媛大学 法文学部(愛媛県 松山市)

⑨ WAKIMURA Kohei、Situating the East Asian Quarantine Politics in the International Context: The Late 19th Century and the Inter-war Period、The International Conference 'Quarantine: History, Heritage, Place'、2014 年 8 月 15 日、The University of Sydney, Australia

⑩ WAKIMURA Kohei、'Fertile', 'Miasmatic' and 'Poor': Tropical Asia under the Western Gaze、International Workshop "Exploring the Origins of the Environmental Crisis"、2014年3月4日～2014年3月7日、Nanzan University, Nagoya, Japan

⑪ WAKIMURA Kohei、'Human Settlement and Population in the Indian History: A Preliminary Note', テーマ別セッションⅤ 'Population and Development in India: Towards a Regional Typology'、日本南アジア学会 第26回全国大会、2013年10月6日、広島大学大学院文学研究科 東広島キャンパス(広島県 東広島市)

〔図書〕(計1件)

① 脇村孝平(田辺明生・杉原薫との共編著)、東京大学出版会、多様性社会の挑戦(現代インド1)、2015年、392頁

6．研究組織

(1)研究代表者

脇村　孝平(WAKIMURA KOHEI)
大阪市立大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：30230931

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし